

「国際語」教育の展望

芸術大学における英語カリキュラム再編の実践から

A View of ‘Lingua Franca’ Education From the Practices Employed During the Reorganization of the English Curriculum at an Art University

山口=内田 雅克 | YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu

I have been working on the drastic reform of the English Education curriculum here in Tohoku University of Art and Design since 2007. This paper is a summary of this research and practice undertaken over a period of about five years.

In this paper, I will first introduce the entire curriculum including the new placement test, the reorganized ability grouping classes, and the opening of some classes with specific purposes, such as an e-learning class for TOEIC and a TOEIC Speaking/Writing class. Also, comments from the teachers of each class are reported.

Second, I will offer data, such as the changes in the students' TOEIC scores and the number of the students taking English courses, and provide some analysis of the effects of e-learning or the trial TOEIC test.

Finally, from a wider point of view, I will discuss the future of English Education in Japan from such perspectives as English as a lingua franca, communication among non-English native speakers, some effective uses of TOEIC, the causes of slow learning, some validity of translation, and the desirable class design in general English Education in the undergraduate course.

Keywords:

英語教育、授業デザイン、イーラーニング、TOEIC、リンガ・フランカ、English Education、class design、e-learning、lingua franca

はじめに

本稿の構成は以下である。

序章

- (1) 公募に示された英語教育方針
- (2) 現実と課題
- 1. 新カリキュラム構築と実践
 - (1) プレイスマントテスト改訂
 - (2) 担当教員からの報告を基に
 - 1) 「基礎」クラス—肯定的見解
 - 2) 「初級」クラス—基礎力・文法・教育訳
 - 3) 「中級」クラス—コミュニケーションアプローチ
 - 4) 「上級・最上級」クラス—学習習慣形成
 - 5) 「発展」クラス—能動的学習
 - (3) 実績と分析
 - 1) 受講者数
 - 2) TOEICスコア
 - 3) e-learning
 - 4) TOEIC模試

2. 課題と展望

- (1) リンガ・フランカ—英語から国際語へ
- (2) スキル—読み・書き・そろばん、そして英語?
- (3) ネイティブ—「信奉」からの脱却
- (4) TOEIC—その賢い利用法
- (5) 不振—努力がスコアに反映しない理由
- (6) 欠如—新テキスト作成における「思考」の試み
- (7) 必修—教育の質の保証
- (8) 希望—基礎からの再スタートへ
- (9) 授業学—総合的授業デザインへ

昨年度の本学紀要には、教養科目「多性研究」の実践報告を投稿した¹。そこでの他者と自己の理解は、「共生」へと至る一つの道筋であった。他者理解を地球市民という観点から考えるならば、そこに共通言語の必要性が生まれる。それが今、教室に座る学生を待つ現代であり、未来であろう。

本稿では、本学着任以来5年余りのなかでの新たなカリキュラム構築の実践を述べ、そこに生じたさまざまな問題・成果をまとめ、今後の本学における英語教育の進むべき方向を示すことを試みる。さらに本学に限らず、広く学士課程の教養英語プログラムにおける授業デザインの実践例を提示するものである。

序章

(1) 公募に示された英語教育方針

筆者が本学の公募に応募したのは7年前である。大学の教育目標に共感を覚え、さらに英語教育の方針が目を引くものであったからだ。そこには、「TOEICを根幹に置く」と明快に記されていた。英語教育の目的・内容に関する論争は長く、途絶えることがない。1970年代の平泉渉参議院議員(当時)と渡部昇一上智大学教授(当時)の「実用」と「教養」という英語教育の目的の二項対立があった²。またコミュニケーションアプローチが重視されれば、文法や和訳の弊害が議論された。

こうした議論に膨大な時間を割かれ、疲弊していた筆者には、教える側も学ぶ側も具体性を持てる方針を軸とした新たなカリキュラム開発は魅力的であった。もちろんTOEICという業者テストが完全な英語力判定を可能にするテストでもなければ、ましてや大学における英語学習の目標にはなりえないことも承知である。だが一方で、一本の軸を立てることには少なからずメリットも生まれるだろう。

第一に、学士課程英語教育プログラムの収束である。個々の教員がそれぞれの意向に沿ってテキストや内容を選択していたのでは、その大学の学生にとって必要な英語力、あるいは社会が求める英語力と遊離してしまう危険性を否定できない。

第二は、多種多様な英語科目を提供できない芸術系の大学などにおいては、その学生にもっとも有益と考えられる英語に特化することは現実的で効率的である。

第三は、学生が自分の能力を、完全にではなくとも、ある程度数値で知ることができれば、わかりやすい英語力判定のツールに、さらには努力目標になりえるであろう。そして、自分の努力を他者に具体的に示せるというメリットも考えられる。

最後に社会のニーズにも応えることになるだろう。2009年11月号のAERA Englishは、103社のアンケート結果を報告している。103社のうち、74.3%がTOEIC受験を社員に勧めるか、義務付けているという³。

こうした「正の面」が、筆者を応募に導いた。

(2) 現実と課題

新たなプレイスメントテストを作成するからと、採用年度の4月1日に出勤の要請が英語科教員よりあった。その意向は、TOEIC類似のプレイスメントテストの作成であった。TOEICをはじめて見るという教員に代わり、連日連夜、プレイスメントテストの作成を行なった。研究室もオフィス用のPCもなかった。

いざ授業が始まるとき、すでに決められたテキストは「日常会話」を中心であった。上級クラス以外は一切TOEICの問題に触れることすらなく、学期末試験に導入するという状況であった。ここにTOEICを一つの軸とする英語カリキュラムを構築していくことが、自分の任務であることを再確認した。

最初の1年でとくに問題であると感じたのは、以下である。

第一に、テキストの選定である。基礎・初級クラスのテキストは絵本であった。学生の英語力に合わせたものかもしれない。しかし、欠落していたのは学生の知的成熟度の考慮である。英語力によって人間の成熟度を蔑ろにしてしまうのは望ましくない。あきらかに幼稚なテキストを前にした学生からは、自信を失う声が聞こえた。「学生の実態にも配慮しつつ、大学生だからこそ使える」テキストを目指すべきであろう⁴。

第二は、学習継続意識である。プレイスメントテストで割り振られた級を受講する。それ以上に学習を継続しようという意識がほとんどなかった。教員の側も同じ認識であつ

た。少しずつ指導や授業を工夫することによって、初級から中級、上級、さらに発展クラスまで、カリキュラム改編に伴いながら継続履修する学生が現れるようになった。

第三は、教員の意識の問題である。簡単な日常会話に終始し、毎時間テストをするでもなく、評価は甘く、学生に確実な力がついているのかという自己評価も十分になされていいるように思えない授業も存在した。また日常会話のクラスは、多くの準備を要しない「楽」なものになる危険性も孕んでいた。教員にとっても、学生にとっても「楽勝」科目であってはならないだろう。

それから1年、基礎、初級、中級で会話中心のクラスをしながら、学生の実態を把握し、さらに教務課（当時）との話し合いを度々重ね、翌年度から少しづつ実践に入った。

1. 新カリキュラム構築と実践

学士課程の教養プログラムにおいて、段階的に英語の熟達度が向上するような体系的カリキュラムをめざし、改革開始から3年目にはようやく一つの形に至ったのが[図表1]の一覧である。[図表2]には、教員数を示した。

クラス名	クラス数 〔前・後期〕	定員	内容	到達目標	テスト	サポート
基礎	3	30			・単語テスト ・文法理解確認テスト	
初級	6/4	40	・基礎的な会話の習得 ・コミュニケーション文法の理解と演習 ・TOEICの実力・基礎問題演習	300点以上	・単語テスト (毎月) ・文法理解確認テスト (毎月)	
中級	3	40	・リスニング、スピーキング演習 ・TOEIC 機構問題演習 (400 レベル)	400点以上	・課題テスト (毎時)	
上級	2	30	・会話の練習 ・スピーキング (NHK ラジオ講座) ・発音指導 (済美) ・英文記事、文学読解 ・TOEIC 機構問題演習 (500 レベル) ・TOEIC e-learning	450点以上	・単語テスト (毎週) ・テキスト復習テスト (毎週) ・NHK ラジオ講座テスト (毎月) ・蓄積度確認テスト (学期末)	【TOEIC 機構】 【定期実施】
最高級	1	20	・会話の増強 ・スピーキング (NHK ラジオ講座) ・発音指導 (済美) ・英文記事、文学読解 ・TOEIC 機構問題演習 (500 レベル) ・TOEIC e-learning	500点以上		【定期】 【定期】 【定期実施】 【定期】 【定期】 【定期】
発展 a 【進学関係】 〔前期〕	1	20	国際的な大学院への進学を考えている学生、学校で英語を勉強を主とする学生、あるいは英語力を向上させたい学生を対象とする。世界の著作物についての英文を通して、楽しみながら確かな読解力を養成する。TOEIC 対策としてe-learningも併用。	600点以上	・蓄積度確認テスト	
発展 b 【L/R】 〔後期〕	1	20	映画 [Notting Hill] を教材とし、自然な会話の聞き取り、発音、リズム、インтонация、会話表現、イディオムなどを習得する。TOEIC 対策としてはe-learningも併用。	600点以上	・蓄積度確認テスト	
発展 c 【S/W】 〔後期〕	1	20	Speaking/ Writing の 漢 言 を TOEIC Speaking/ Writing テストに慣れてさせて行く。平易な英語フレーズレシピ帳などでできるようにする。Writingに関しては、7種類のネイティティブチャックラスク等と動いて行なう。	600点以上	・スピーキング/プレゼンテーションテスト ・エッセイライティング	
発展 d 【総合】 〔前期〕	1	20	e-learning で TOEIC テスト対策向けの漢言、就職、進学のために複数的な TOEIC スコアリンクを目標とする。	600点以上	・蓄積度確認テスト	
ネイティブチェック	1		英文の添削			

[図表1] 2010年度カリキュラム一覧

[図表2] 教員数一覧

専任	日本人1名 ネイティブ1名(2009年度まで)
非常勤	日本人4名 ネイティブ2名
教員総数	7名
年間受講者数	約800名
教員1人当たりの担当学生数	約110名

(1) プレイスマントテスト改訂

2007年度までのTOEIC類似問題プリントによるテストでは、採点を非常勤講師全員及びアルバイト数名によって行い、経費の負担も大きかった。2009年度より筆者作成テストを冊子形式にし([図表3]プレイスメントテスト)、さらに採点もスキャンを利用し、筆者が一人で行った。

[図表3] プレイスマントテスト

東北芸術工科大学 英語 プレイスマントテスト

* このテストは、英語を受講する際のスタートクラスを決定するものです。

[注意]

- 1 答解は、すべてマークシートのアルファベットを、鉛筆(またはシャープペン)でしっかりと横くぎりつぶすこと。
- 2 訂正する場合には、消しゴムで完全に消すこと。
- 3 問題冊子には一切書き込みをしないこと。
- 4 試験終了後、マークシート、問題冊子の両方を提出すること。

[手順]

- 1 指示に従い、マークシートの氏名・学番号欄(左詰め)を記入して下さい。
例

フリガナ	ハイジンヒ タロウ
氏名	芸術 太郎

2 試験はリスニングから始まります。

Part 1 は、放送される(a)~(d)の英文の中から、写真を描寫している英文を1つ選びます。

Part 2 は、質問文に対する適切な答えを、(a)~(d)から1つ選びます。

Part 3 は、会話を聞いて内容に関する質問の答えを、(a)~(d)から1つ選びます。

Part 4 は、説明文を聞いて内容に関する質問の答えを、(a)~(d)から1つ選びます。

3 リスニングは5分程度で終わります。残りの40分でリーディングの問題に解答して下さい。

4 終了の合図があったら、試験監督が問題冊子、マークシートをすべて回収します。確認が終わるまで着席して下さい。

[図表4] プレイスマント配分

年度	受驗數	基礎	初級	中級	上級	最上級
2007	518	141	221	118	38	未設置
2008	464	160	185	90	29	未設置
2009	547	125	260	113	38	11
2010	549	110	377	45	16	1
2011	582	124	391	63	4	0

また、これまでの入学生が学習する級ではなく、スタートする級を決定するという考えに基づいた。文法の理解と定着を中心に、高校までの基礎英語力を測定した。

[図表4]は、ここ数年のクラス配分人数である。2010年度からは既定のクラス数・定員に合わせて受講生を配分するのではなく、その英語力に沿った方向に転換したため、「初級」が大幅に増えている。

(2) 担当教員からの報告を基に

1) 「基礎」クラス—肯定的見解

報告(降幡美佐子非常勤講師)

基礎クラスでは基礎的な英文法の知識と共に、基礎的な単語力の不足も深刻である。これらの習得に際して、一般的な文法説明や反復的な単語練習では効果が上がらないケースが多く見られる。中学校やそれ以前に英語に出会って以来、学習を楽しいと感じたことが皆無である学生も多いので、TOEICプリッジのテキストと並行して、楽しめる内容の物語(音声付)を使用している。物語の同じ場面を何度も繰り返し聞き、音読することによって、楽しみながら語彙を増やすことを目指している。毎回授業の最初に、前回読んだ箇所の単語テストを行っている。

もともと英語が好きな学生はほとんどないので、期末にTOEICプリッジという彼らにとって「とても」難しい試験を義務付けることは、英語学習の一つの動機付けになっていると思われる。それでもスコアが順調に伸びない学生が多数存在するのは、授業以外の時間に英語に触れる機会の少なさにも原因があると考える。NHKテレビやラジオの教育番組まで視聴するほど意欲旺盛な学生はごく少数である。どのように自主的な英語学習時間を増やすことができるかが今後の課題である。

また集中力を要する英語の授業が、おもに1時限と6時限に設定されているのは、学生にとってかなり厳しい状況であろう。(アンダーライン筆者、以下同じ)

第一に、英語に対して嫌悪感こそあれ、「好き」な学生が極めて少ないという現実を直視しなければならない。「英語に対する肯定的見解」を持たせることが、「基礎」クラスでは肝要になろう。だが、初級以降に備えて、文法の体系的学習は必須である。「楽しい」学習への傾倒

が、英語力の向上をあまり期待できなかった過去の再現に至ってはならない。

時間割設定も重要な問題である。1時間目からの授業で疲れ切った学生に、6时限の語学の授業は苦痛となってしまう。受講を勧めるのであれば、無理なく集中できる時間帯の設定という配慮も必要である。

2) 「初級」クラス—基礎力・文法・教育訳

報告(豊嶋美由紀非常勤講師)

芸工大では入試に英語が必須ではないので、英語の苦手な学生も多いと思われる。プレイスメントテストで初級と判断されているとはいって、学生の学力に差があり、中学で学習する文法に不安のある学生も多い。そこで使用テキストに沿って、ごく簡単と思われることも説明をし、全員の理解を必ず確認するようにしている。

基本が出来ていないので、応用の学習はなかなか望めない。第二言語を習得するには一定の努力が必要だが、「手っ取り早く、すぐに上達したい」と語学学習を安易に捉える傾向も見られる。努力の必要性と大切さを説きながら、そのなかで英語の面白みを見出し、意欲的な学習に結びつくよう願いつつ授業に臨んでいる。

「初級」クラスは、文法指導とTOEIC入門を核としている。文法指導のテキストは、これまでの学習をほとんど前提としていない。まるで英語学習の害毒のように言われるのが、文法と訳である。しかし、文法を勉強するから「話せない」わけではない。大学生の年令になれば、むしろその知力を利用し、ことばのルールをしっかりと理解した方が効率的であろう。留意すべきは、文法学習に終始しないことである。さらに文法テキストにおいても、確実な理解をもたらすためにしっかりと「訳」をさせている。イギリスの応用言語学者ガイ・クックは、「訳」の効用を「教育訳」という観点から見事に立証している⁵。「初級」で目指されるのは、基礎作りである。基礎力がないところに、いくらその場かぎりで「話す」練習をしたところで、成果は期待できない。

また初級の受講生数がもっと多く、英語学習のスタート地点であるため、バックアップ体制の充実を試みている⁶。月ごとの英単語リストの配布とテストの実施、テキスト各レッスンごとの理解確認テストの実施、補助プリント作成などである。

さらに担当教員からの要望や意見を、紙面や口頭によって聞くように心がけている。

3)「中級」クラス—コミュニケーションアプローチ

報告(John Di Stefano非常勤講師)

I use a communicative approach in my language teaching, encouraging my students to practice their English with each other in a meaningful, real-world, communicative way in the classroom.

The goal of the course I teach at Geikodai is to raise students' TOEIC scores. Because I get my students to use their TOEIC reading and listening textbooks in a communicative way, target structures presented in the textbooks are more easily internalized, and learning becomes more enjoyable for students.

Fully one half of the TOEIC test is devoted to testing students' listening comprehension. To give my students more listening practice, I use "English only" in the classroom. After all, students are studying English, so why address them in nihongo?

I strive to maintain a non-threatening, comfortable atmosphere in my classroom. I really try to make my classes enjoyable, using lively body language, English games, music, and a generous amount of humor. The intrinsic motivation generated by a good-feeling classroom atmosphere helps to motivate my students to come to class, learn more, and sleep less in class!

新たな「中級」クラスではTOEIC問題演習に入るが、問題のレベルは基礎である。この級は全てのクラスをネイティブ教員が担当している。学生の多くが受講するのは、「初級」と「中級」の2クラスであり、また基本を一応終了する「初級」の後であれば、簡単なリスニングやスピーキングにも対応できると判断したからである。

デスティファノ非常勤講師の記述は、英語を母語とする教師に典型的な一面を見せていている。メソッドはコミュニケーションアプローチであり、学生の第一言語を排除した空間を理想的とみなしている。この一見説得力のある議論は、日本人のネイティブ信奉と相まって、これまで久しく語学学習において覇権的な地位にあったといえよう。だが、今、それは既出のガイ・クックや日本人学者によって必ずしも理想的な教授法とはいえないのではないかという疑問も提示さ

れている。

4)「上級・最上級」クラス—学習習慣形成

ここからの級は、要求する学習量という点で、あきらかに現状では他のクラスと一線を画している。語学学習の適性、学習時間の確保、本学での英語教育の目的などを明確にし、その上で慎重に履修をさせている。英語を特技としているとする学生に向けたコースとして位置づけられる。授業準備と授業外のケアに多くの時間を要するため、唯一の専任教員である筆者が担当している。

授業では、一つ一つのアクティビティに目標を設定し、学生にそれを示し、達成感を持たせるよう配慮する。活動の細分化と明確化によって、興味・関心を引きながら、集中力を維持させてゆくことを心がけている。またそれぞれの活動ごとに、呼名して理解を確認している。授業の流れは以下である。

[図表5] 授業デザイン

時間[分]	学習内容
00-05	語彙/復習テスト*1
05-20	スピーキング練習(NHKラジオプログラムを利用して*2)
20-40	TOEICリスニングパート実践演習
40-55	新聞・雑誌記事/英語の歌/DVDによる発音指導/英語の名言を利用したディクテーションと会話など*3

*1 ListeningとReadingのテキスト及び語彙テキストより、全授業(30回)分を作成し、曜日毎に語彙と復習に分けて実施している。

*2 NHKのラジオ英語番組を、毎日自習するよう指導している。自習の指示だけに終わらないように、毎時間授業でもペア練習などを取り入れ、学習の継続も促している。場当たり的な会話ではなく、系統的な練習によって多くの表現を習得できるところがNHKテキストのメリットである。月に1回、筆記試験も実施している。

*3 記事はTOEIC学習法・企業の求める英語力など、モティベーションを高めるものを取り上げることが多い。歌は本学学生のイラストを入れた歌集を作成・配布している([図表6])。発音指導は、学習活動の単調さを排除する目的も併せて、DVD教材によって行っている。名言のディクテーションは、そこから「自分の考えを述べる」というアウトプットに発展させている。現在は「最上級」クラスで実施している。

[図表6] 手作り歌集



[図表7] 授業外縁デザイン

授業前	単語テスト/復習テストの準備
授業後	リスニングの聞きなおし 授業で学習した全ての英文の音読
自習	①NHKラジオ講座(毎月テスト実施) ②e-learning 毎日30分程度(頻繁な学習状況チェック実施)*1 ③「最上級」クラス Writing & Native Check*2

TOEIC終了後は、情報獲得を目的とするリーディングではなく、内容を味わったり、考えたりする読解へと移行し、また個人指導などを少ない時間であるが取り入れている。

学習者の授業時間外の自習に対する助言、奨励も授業の一環である。[図表7]は、オリエンテーションプリントに掲載した自学自習の指示である。

*1 e-learningでは、学習のautonomyが求められる。しかし学生の実態を考えると、個別の支援が必要となる。[図表8]のような計画表を作成し、定期的にテストを受験させ、さらに頻繁に学習状況をチェックし、授業時及び個別に指導を行っている。また各自がそれぞれのコンピュータを使用しているためにトラブルも多く、機器使用のサポート態勢も整えている⁷。

*2 自分の専門分野に関して、あるいは日記を英語で書かせ、ネイティブにチェックを受けるよう指導している。

学生の多くが専門科目の作品制作などで、英語にまとまった時間を割けないのが現状である。そのため、通学時などを利用し、生活のリズムに英語学習を取り入れるよう指導している。

[図表8] e-learning学習指導

e-learning 学習計画とテスト予定			
アルク e-learning『スーパースタンダードコース』の進み方および今期の学習計画です。			
◆最初にリスニング、リーディングそれぞれのペースは自己テストを受験してください。この複数テストを修了しないと、サブコースの「リスニング」、「リーディング」、「TOEICテスト演習」の学習開始できません。			
◆『スーパースタンダードコース』の概要ですが、「リスニング」「リーディング」など50のユニットがありますから毎日の英語学習の中で取り組んでください。そこで指定されているユニットを学習し、「テスト」(画面ごとに複数テストを受けてください)。			
◆こちらの後に「TOEICテスト演習」と単元別演習は充実の「演習」があります。「TOEICテスト演習」は10セッタ用意されていますが、「演習」は学習した単元の内容によってポイントが加算されます。これらの動画も随時公開されます。			
◆以降は週ごとの複数テストの予習をします。週ごとに「テスト」の画面について複数テストを受けてください。テスト提出期限を過ぎると、テストは画面から消えてしまいますが、再度登録して下さい。テスト結果はe-learning学習帳と共に表示されます。			
テスト実施予定表			
	テスト実施期間	Lor R	ユニット#
テスト①	10/30 ~ 11/5.	R.	05.
テスト②	11/6 ~ 11/12	L.	05.
テスト③	11/13 ~ 11/19	R.	14.
テスト④	11/20 ~ 11/26	L.	18.
テスト⑤	11/27 ~ 12/3.	R.	27.
テスト⑥	12/4 ~ 12/10.	L.	23.
テスト⑦	12/11 ~ 12/17	R.	36.
テスト⑧	12/18 ~ 12/24	L.	31.
テスト⑨	12/25 ~ 12/31	R.	50.
テスト⑩	1/1 ~ 1/7.	L.	42.
			NASA. 2018年1月へ。

もちろん、これらの他ごときひき分けあるユニットランダムに並べても問題ありません。e-learningの学習方法で不明な点がある場合は電山(本稿518)まで。

5)「発展」クラス — 能動的学習

現在は4クラスを開講している([図表1]参照)。「最上級」クラスまでの学習の上に、特化した目的を設定している。現行は各クラスとも年に1回の開講だが、表中の「発展b,c,d」に関しては前期・後期2回の開講を希望する声が多い。「発展b」クラス[Listening/Reading]では、映画を教材として使用し、英語圏の文化にも目を向けさせている。芸術大学で提供できる英語科目は限られてしまうが、少しでも学生が「楽しめる」授業をという思いから設置したクラスである。「発展c」クラスは、TOEICのスコアを向上させて、就職活動などにおいて活用したいと希望している学生のためのクラスである。「上級・最上級」クラスより多くのe-lerning自習が課せられる。また週1回の授業時には、文法テスト・語彙テスト・ニュースの英語によるリスニング演習などを毎時間行っている⁸。

「発展d」クラス[Speaking/Writing]は、昨年度新たに設置したクラスである。TOEICで新たに実施され始めたS/Wテストにも対応できるようにしている。ここでは日本人教員とネイティブ教員とのチーム・ティーチングを、本学でははじめての試みとして取り入れた。以下は、担当ネイティブのSpeaking/Writingクラス及びネイティブチェッククラスについての報告である⁹。

報告(Speaking/Writing, NativeCheckクラス[Randy Nelms非常勤講師])

Reading and listening are input skills. When you read and listen to correct English sentences, they are input into your memory. Quantity is the key to improving these skills. On the other hand, speaking and writing are output skills. These skills can only be developed by creating output, in other words, by actually speaking and writing. Quality is very important in improving these skills, and a teacher's supervision is definitely needed.

The Native Check class provides students with an opportunity to improve their writing proficiency by having it reviewed by a native English speaker. In the Speaking and Writing class we use Tactics for TOEIC Speaking and Writing Tests. This text includes practical tips, language building activities and tactics reinforced with immediate practice. Although the text is designed to help those planning to take TOEIC tests, the activities are extremely useful for

anyone wishing to improve their general language proficiency.

The biggest obstacle faced in both classes is helping students to overcome their shyness and increase their confidence in speaking and writing English. Hopefully this can be done by continuously providing them with encouragement and positive reinforcement.

インプット、アウトプットに関して、それぞれ量と質という指摘は大いに示唆に富み、Speaking/Writingクラス、ネイティブチェッククラス設置の意義を再確認する。また英語学習者に対するencouragement(励まし)、positive reinforcement(肯定的強化)も本学では必須である。

Speaking/Writingクラスへの学生の感想は、人数が多いこと(聴講生も含め15名)、学生間の英語力差などには要望が見られたが、概ね好評であった。

ネイティブチェッククラスは、学生が自分の書いた英文を添削してもらう機会として2010年度より設定したものである。「最上級」クラスでは評価の一部に組み入れている。毎回平均4~5名の学生が夜遅くまで取り組んでいる。クラスの様子を覗くと、ある学生は自分の専門に関する英文を書き、教員の添削を受けた後、自分の英文を音読して聞いてもらうという自分なりの学習プロセスを作っていた。「能動的学習姿勢」を育めるクラスである。

(3) 実績と分析

本節では、前節の実践に対する分析を行う。

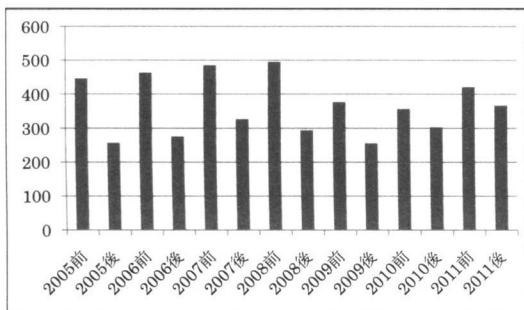
1) 受講者数

現行カリキュラムが本格的に始動した2009年以降、後期受講生は増加している([図表9-1])。それまでのそれぞれ前期と後期に1、2と異なる科目ではなく、前後期に同一科目を配置した。前期は教室が満杯であり、後期はほんの数人という非効率な態勢を改め、1クラスの人数を均し、また学生の学習スタートを学部の必修科目などに合わせてフレキシブルに対応できるものとした。またこのシステムにより、2013年度から実施予定のリメディアル基礎教育「基礎英語」のクラス増えスムーズに進行した。

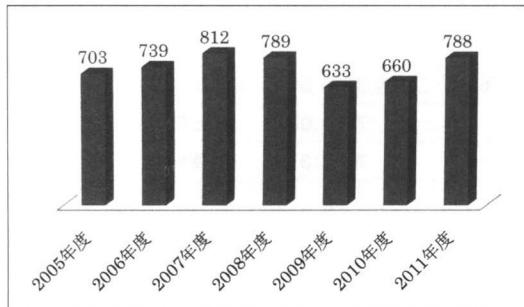
一方、2009年度は受講生がそれまでと比べ大幅に減少

している（[図表9-2]）。この年度から初級から上級に至るまで体系的なクラス編成が完成し、これら全てのクラスでのTOEIC導入、毎時間の小テストの実施など、細密化と厳格化が実行されたためと考えられる。2011年度からの再増加は、TOEICの定着と学部レベルでの英語学習の奨励が大きな要因となっていると考えられる。

[図表9-1] 受講者数の変化



[図表9-2] 年間受講者数



2) TOEICスコア

次にTOEICのスコアを追跡したい。

[図表10]は、着任以降6年の「中級」以上のクラスの平均スコアの変化を示したものである。2009年度までは「初級」にはTOEIC受験が課せられていなかったため、分析対象から外している。グラフからは、徐々にではあるがスコアの上昇が見て取れる。

各級の平均スコアは概ね目標スコア（[図表1]参照）をクリアしている。

次に、2012年度前期スコアのデータを基にして、各級の目標スコア達成度（受講生の何%が目標スコアを超えたか）を検証する。

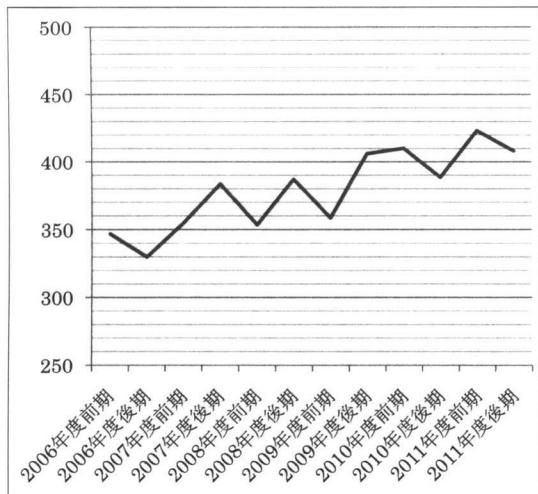
「初級」及び「中級」では、ほぼ半数の学生が目標スコア

を超えている。[図表11]は、「上級・最上級」の達成率である。

平均スコアは、各級の目標を達成している。一方で受講生のうち目標スコアを達成している割合は、上級で75%、最上級・発展ではおよそ5割であるが、授業に皆勤している学生だけを見ると、約7割から8割が達成している。

またこのような数値の提示に際しては、まず平均スコアが示されることが多く、上位層の努力が、平均スコアを嘆く声のなかで不可視にされてしまうことが多い。[図表12]は、2010年度後期に570点以上を取った学生の一覧である。

[図表10] 中級以上のスコア変化



[図表11] 目標達成率

級	目標スコア	スコア平均	受講生の目標スコア達成率 (欠席の多い学生を除いた場合)
上級	450	486	75% (82%)
最上級	500	513	50% (67%)
発展	600	645	57% (71%)

上記の表には、プレイスメントテストで「最上級」、「発展」クラスに判定された学生はいない。すべて初級、中級、上級から学習を継続してきた学生である。

[図表12] 2010年度570以上取得者

#	受講クラス	Listening	Reading	Total
1	発展	455	380	835
2	最上級	415	395	810
3	発展	360	300	660
4	最上級	355	275	630
5	発展	375	245	620
6	上級	330	285	615
7	発展	370	235	605
8	発展	325	270	595
9	上級	285	300	585
10	発展	285	295	580
11	発展	290	280	570

3) e-learning

本節では、2009年度より導入したe-learningに関して、その学習状況と効果を検証する。

[図表13]より、三つの点を読み取ることができる。

第一に、確実なスコアの伸びを見せたのはおよそ30時間以上学習した学生である。少なくともその程度の学習時間がなければ、e-learningの効果を期待するのは難しいということであろう。学習期間がおよそ80日であるので、1日の学習時間は30分程度である。一つの目安として、学生にも提示できるだろう。

第二は、担当教員による学習時間の差である。後期に限り、専任教員が他の教養科目を担当するために、上級クラスの一つを日本人非常勤教員が担当している。それが表中の上級2である。e-learningに対する理解と指導の依頼が十分ではなかったと思われる。

第三は、学習時間に注目したい。2011年度後期の平均学習時間は13時間32分で、2011年度前期のおよそ2倍、2010年度前期のおよそ4倍になっていることである[図表14]。2011年度前期には、学習期間の中間地点で、学習時間が1時間にも満たない学生が半数を占めていた。導入時は、自習という概念から学生に任せた形であったが、以降、評価への導入、その周知徹底、指導回数を増やすことによって、ようやく学習時間が伸びたと考えられる。

electricな学習も、マンパワーによる丹念な支援なくしては効果を期待できないといえよう。e-learningも使い方次第では無駄になる危険性を孕んでいる。

[図表13] 2011年度後期e-learning実施学生の学習時間とTOEICスコア変化

#	スコア増減	学習時間	クラス
1	220	36:40:44	最上級
2	90	34:31:51	最上級
3	-65	33:44:33	映画
4	175	33:24:28	最上級
5	-35	31:49:48	上級1
6	20	25:40:31	上級1
7	70	22:18:48	上級1
8	-80	21:43:49	映画
9	65	20:57:20	上級1
10	20	20:33:29	上級1
11	35	14:58:34	上級1
12	-25	12:26:55	上級1
13	-105	12:05:28	映画
14	155	11:43:41	映画
15	10	11:22:53	上級1
16	80	10:31:29	上級1
17	10	10:11:43	最上級
18	115	10:08:13	最上級
19	45	10:01:02	上級1
20	120	9:32:01	上級1
21	0	7:48:00	最上級
22	-140	7:08:37	上級1
23	75	7:04:38	映画
24	-10	7:04:06	上級1
25	-70	5:30:28	映画
26	10	5:25:43	映画
27	-100	4:14:50	上級1
28	35	2:56:08	上級2
29	-45	1:35:08	上級2
30	120	1:19:56	上級2
31	0	1:10:56	上級2
32	60	0:42:45	最上級
33	65	0:36:58	上級2
平均	28	13:32:54	

[図表14] ALCスーパースタンダードコース学習時間平均の推移



4) TOEIC模試

TOEIC模試は、2009年11月からほぼ毎月1回土曜日に実施している。現在までの参加者延べ人数は664名である。学生の感想は「TOEICの流れがわかった」、「本番前に体験できてよかった」など、授業ではできない実際の長さの経験をプラスに捉えている声がほとんどであった。

2. 課題と展望

本章では、本学英語教育の理念と目的を明確にし、その上で今後の英語教育への展望を述べたい。

(1) リンガ・フランカ—英語から国際語へ

本稿のタイトルにおいて、「英語」ではなく「国際語」ということばを用いた。音韻学を専門とする研究者であるジェニファー・ジェンキンスは、現代の英語をこう分析する¹⁰。

Thus, no concessions are made to the fact that English differs from other foreign language learning in so far as the majority of learners will speak it as a lingua franca with other 'NNSSs' rather than as a foreign language with NSs.(Jenkins, p239)

英語母語話者より「英語を母語とはしない」人々とのコミュニケーションに英語が用いられる時代の到来は、疑いのない事実である。同時通訳者であり、英語教育研究者でもある鳥飼玲美子はこのジェンキンスの国際語としての新たな英語の取り組みに着眼し、native-likeを目標に掲げることに終止符を打つことを提言している¹¹。言語学者矢野安剛は、「英語はもはや英語圏の文化的伝統に基づいた母語話者英語ではなく、地球規模で使われている『国際語としての英語』(EIL: English as an International Language)」であるとする¹²。そして、「国際語としての英語」(English as an International Language)の話者をこう捉えている¹³。

母語・母文化のアイデンティティを保持しながら、国際的

理解度の高い英語を話し、同時に非母語話者英語に偏見を持たず、国際的な場で臆せず、威張らず、誰に対しても対等に接する態度を身につけることを目指す。それはグローバル化の進行により迫りくる多民族・多文化共生時代への重要な準備となる。

これからの大学の英語教育に明解な道筋を開く言である。非英語圏の人間同士のコミュニケーション手段として、新たな英語の創造、脱英語圏の意識が求められるであろう。英語圏でネイティブによって話される英語を絶対的な目標として設定する時代は、終焉を迎えつつある。矢野が描く真の国際人の育成は、まさに本学の国際語教育を目指す像であろう。

(2) スキル—読み・書き・そろばん、そして英語?

英語が社会的な自立、すなわち「生きていく」ためのスキル—「読み・書き・そろばん」、3R(Reading, Arithmetic, Writing)—とともに並べられることがある。英語、あるいは英語によるコミュニケーションは、はたしてスキルなのだろうか。ここでの英語力とはいかなるものがイメージされているのか。アルファベットが読めて、地下鉄の出口がわかるのか。自分の名前をローマ字表記できることか。コミュニケーションとは、英語で道を尋ねることではない。「英語をツールとして、コミュニケーションをスキルとして軽く考えてはならない」と、鳥飼は警鐘を与える¹⁴。

筆者は客員研究員として在米中、Arizona State Universityにおいて学部・大学院の授業を受講した。異言語空間での生活、学習、人間関係において、英語がコミュニケーションツールと呼べるほどに単純ではないことを身を持って知った。日本人として、国内で生きてゆく上での最低限のスキルという読み・書き・そろばんに、英語という異言語が続くとは思えない。その習得の困難性は、誰よりも日本人の多くが知っているのではないだろうか。

(3) ネイティブ—「信奉」からの脱却

英語はネイティブに習うべきである。はたしてそうであろうか。ネイティブ、ネイティブと、まさに「信奉」に近い日本人の思いは、何をもたらしてきたのか。英語圏のネイティブを前に、その言語と文化に憧れ、ネイティブのように話したい

という願望に突き動かされてきたのではないか。あるいはネイティブ教員によっては、言語と同時に、文化の「違い」を教えるのではなく、優位なもとして押し付ける傾向がなかつたか。

もちろん、英語教育におけるネイティブの有効性・必要性に異議を唱えるわけではない。だが、懸命に英語を勉強し、語学習得の苦労を知っている日本人教師が念入りに準備をした授業が、ネイティブ教員の授業に劣るというものではないだろう。

本学では、ネイティブ教員の有効性が最大に發揮されるように、以下の点に留意すべきであろう。本学の英語教育の目標を共有し、そのための資質を備えたネイティブ教員を選抜し、そしてもっとも適所に配置することである。「ネイティブに習えばどうにかなる」「ネイティブの意向に沿う」「ネイティブがいれば体裁が整う」ではなく、日本の大学側がイニシアティブを執らなければならない。「何となく英語を勉強した気がする」が、着実な力が身についていない状況を学生に提供してはならない。

本学では2013年度より、これまで一人の教員が担当していた1科目週2時間を日本人教員とネイティブ教員が、それぞれ1時間ずつ担当する方法を探る予定である。テキストは後述の2冊セットを用い、日本人は正確な読解と文法理解をおもに担当し、ネイティブはSpeaking/Writingの練習を取り入れながらTOEIC演習も行い、それぞれがその長所を最大に發揮できるものとしたいと考えている。

前掲ジェンキンスは、ネイティブ教員が大量に輸入されている日本などにおいて、リンガ・フランカという考え方方が日本人教員に自信を持たせることに繋がると言及している¹⁵。加えて、独立型のチーム・ティーチングも自信を高めることになるだろう。

(4) TOEIC—その賢い利用法

「グローバル」「就職」、そうしたことばとともにTOEICという5文字が飛び交う。冒頭で述べたように、英語教育においてTOEICという1本の軸を立てることには異論はない。いくつかのメリットが既述のように存在すると考えるからだ。

だが、英語学者安井稔が指摘するように、TOEICによる英語力測定には疑問も投げかけられている¹⁶。また、TOEICと就職も安易に結びつけることはできない。英語

力を入社前から求める企業もあるが、実際に英語力を認められ、それを生かすことを期待される学生の英語力は決して低くない。英語を特技として就職に有利なレベルまで持ち上げるのは、高いハードルである。帰国生やインターナショナル・スクール出身者も珍しくなく、企業の採用に関しては外国人枠もある。その英語力を期待する社員であれば、こうした人材が優先されるだろう。日本マイクロソフト前社長である成毛眞一がその衝撃的なタイトルの本で鋭く指摘するように、英語やTOEICということばに軽佻浮薄に踊らされてはならないだろう¹⁷。

いつか海外で勉強をする機会が訪れるかもしれない。あるいはビジネスで必要となるかもしれない。英語を母語としない多くの人々と出会うかもしれない。そのときのための「基礎力」をしっかりと身につけさせるというのが、本学の現実に見合った目標であろう。また、「努力のできる人間」として、その学習歴は認められるであろう¹⁸。

本学では、来年度からの新たな評価項目が用意された。その配分に英語という科目が苦汁を強いられたのは紛れもない事実である。なぜなら、TOEICによって思考の側面や英語授業の楽しさが奪われることも否定できないからだ。初級担当教員の「TOEICによって英語嫌いも増えている」という指摘は看過できない。実際本学の英語の授業で、TOEICの演習だけを行っている教員は一人としていない。TOEICやそのスコアを過信することなく、扱いを慎重に、そして賢い活用が求められるだろう。

(5) 不振—努力がスコアに反映しない理由

こうしたTOEICのスコアや学習状況の考察から見えて来るもう一つの点は、まじめに学習に取り組みながらも、スコアが向上しない学生の存在である。ここでは、長期に渡って英語を受講した学生のデータをできるだけ追跡し、そこに共通点を見出し、今後の課題を明確にしたいと考える。

[図表15]には、対象とした学生の入学時プレイスメントテストの結果、英語クラス受講中のe-learning学習時間が示されている。後者は、学習努力の一つの指標を提供するを考える。[図表16-1]～[図表16-6]は、それぞれの学生の4回のTOEICスコアの変化を示したグラフである。

第一に、英語受講開始後に順調なスコアの伸びを見せる学生は、やはりプレイスメントテストで上位のクラスに判定されていることである。既述のように、プレイスメントテストで

[図表15] 調査対象学生の入学時プレイスメントテスト結果とe-learning学習時間

学生	プレイスメントテスト	e-learning学習時間
A	基礎判定	30:51
B	初級判定	29:18
C	基礎判定	37:38
D	中級判定	66:30
E	上級判定	21:20
F	上級判定	0:50

は、高校までの学習、とくに文法の理解と定着を測定している。この基本がその後のTOEICの学習においても肝要な基盤となることを見せている。

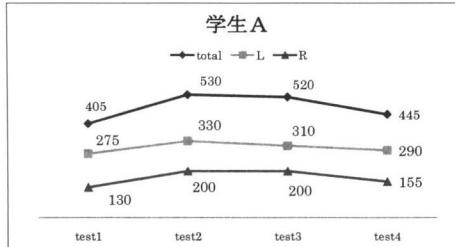
また学生A、B、Cはリスニングに比べてリーディングのスコアが低く、さらにスコアにあまり変化が見られないという共通した傾向を見せている。一方学生C、D、Eは、リスニングとリーディングのスコアの差が少なく、学習期間の長さに伴ってリーディングのスコアも伸びている。これらの学生は全員が「発展a」クラス[英文読解]を受講している。そこでは芸術作品に関する論文など、TOEICのリーディングとは全く異なる英文を精読させている。「内容のある英文がきちんと読めるようになる」ことが目標である。こうした学習なくしては、TOEICのスコアの向上も期待できないのではないか。いくら多くの時間を割いてTOEICの演習問題に取り組んでも、ある一定のレベルからの向上は難しいと言えるだろう。

(6) 欠如一新テキスト作成における「思考」の試み

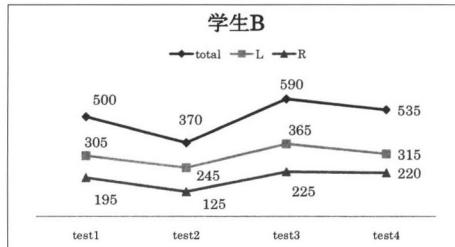
「思考」、それはTOEICを軸とした学習の課題である。2013年度からの評価項目には、知識・理解、思考力、課題発見力、発想・構想力、表現力、倫理性、実行力、基礎学力、自己管理、人間形成力とある。TOEIC演習がカバーするのは、知識・理解、基礎学力の項目だけであろう。それは大学が担う英語教育として、はたして十分と言えるのだろうか。TOEICのテキストを中心に置いた授業のなかで、いつしかフラストレーションが蓄積される。ビジネスや英語圏のキャンパスライフの場面での情報取得がその大半を占めるリーディング・リスニング、そして日常会話の練習に因るものである。「充ち足りないもの」、それは「思考」である。

国際語教育において念頭に置かねばならないのは、理解力、critical thinking、学問的探求能力、自己表現力で

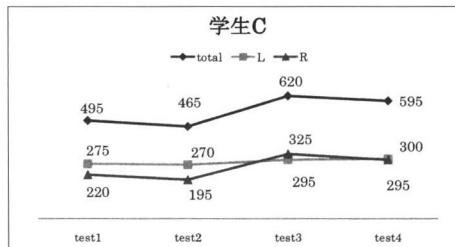
[図表16-1]



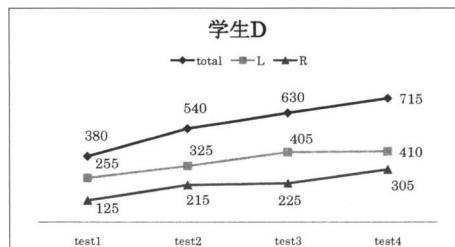
[図表16-2]



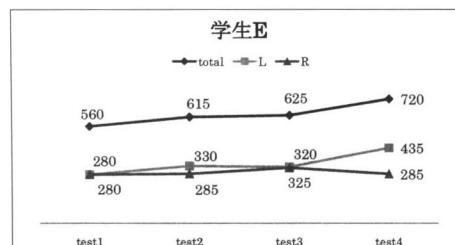
[図表16-3]



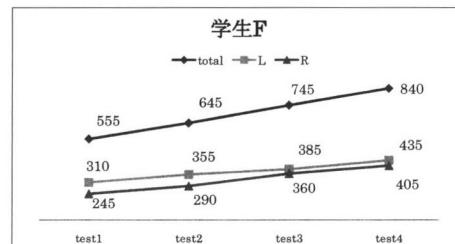
[図表16-4]



[図表16-5]



[図表16-6]



ある。TOEICという名を借りた「実用性」に、大学英語教育のすべてを託すことはできない。コミュニケーションということばに翻弄されてはならないことを警鐘する学者は少なくない¹⁹。

一方で、本学のような芸術系大学ではTOEICの効用も既述のように存する。本学の実情に合い、TOEICを上手に活用しながら、大学の英語教育としての「思考」を有するバランスの取れた英語教育を目指すのが、本学の英語教育が見出す道ではないだろうか。

そこでここ数年、本学英語教師の協力の下、芸工大生を念頭に置いたテキスト作成に取り組んできた。すでに3年の月日が経過しているが、ようやく来年度から使用の目途が立っている。

自主的なテキストは、計5冊から成る。1冊はすべてのレベルのクラスで携行させる自習用文法テキストである。レベル別文法テストの実施によって、全学生の基礎力の定着を図る。

他の4冊は、2冊ずつがペアになり、ReadingとTOEIC演習から成る。トピック、文法学習項目に共通性を持たせている。Book1 Reading/TOEIC、そしてBook2 Reading/TOEICで、ほぼすべての文法事項を網羅するように構成されている。〈図表17-1〉および〈図表17-2〉は、トピックと文法項目の一覧である。Reading テキストを日本人教員が、TOEICテキストをネイティブが担当する。

さらに学習の充実を考え、理解確認小テスト、要約、語彙集、TOEIC模擬問題、単語テストなどの付録を充実させた。

(7) 必修一教育の質の保証

必修の目的は、「全学生に就職に有利なTOEICスコアを取得させる」「国際的な活動のできるアーティストを育成する」といったことだろうか。いずれも非常に大切であり、とくに後者は魅力ある大学づくりにもなることは確かである。しかし、既述のように企業の目に留まるスコアは決して低くはない。ほとんどの学生が中学・高校で英語を苦手とし、学習してこなかった現実を直視しなくてはならないだろう。「やればできる」と安易に結論づけることはできない。それほど簡単に語学は身に付くものではない。学習を継続し、記憶力によって定着させていく語学学習にも、「向き不向き」、「能力の有無」があろう。因みに最低でも1日2

時間、半年間継続することでようやく確実なTOEICのスコアの伸びが見られるというデータは複数出ており、標準的な学習量と見なされている。

こうした現実を踏まえると、全員必修化した場合に「英語で苦しむ」学生が多く現れるのは必至であろう。現在の選択制においてさえも、とくに「初級」クラスでは、いかに授業に参加させ、学習させるかが大きな課題となっていることは既出の担当教員の報告にあきらかである。また中級から上級と継続し、真面目に授業に取り組んでいてもスコアが伸びない学生も現実にいる。その時間をもっと有意義であり必要な勉強に充てることの方が望ましいかもしれない²⁰。

また必修とするならば、それ相応の学習環境を提供しなければ、これらの学生へのケアは無理であろう。CALL教室(computer assisted language learning)、20~25名の

〔図表17-1〕新自主作成テキストの内容一覧

BOOK 1	文法	READING テーマ	TOEIC テーマ
Lesson 1	文型	Old Friends and Wine Health are Best	
Lesson 2	時制①	Hakata Dolls	Shopping
Lesson 3	時制②	On the Ropes	Sports
Lesson 4	現在分詞	Engines of Growth	Travel
Lesson 5	過去分詞	Art & Design	Art & Design
Lesson 6	助動詞①	In the Back of Beyond	Nature
Lesson 7	助動詞②	Nagasaki	Social Issues
Lesson 8	不定詞	It's a Man's World – in Japan	Gender
Lesson 9	動名詞	J-pop and the World	Entertainment
Lesson 10	使役・感覚	Group vs. the Individual	Culture
Lesson 11	名詞	Genetically Modified Foods	Science
Lesson 12	代名詞	Electric Car	Environment
Lesson 13	形容詞・副詞	Sleep	Sleep & Dream
Lesson 14	接続詞	Coffee or Tea?	Taste
Lesson 15	前置詞	Life on Earth?	Biodiversity

[図表17-2] 新自主作成テキストの内容一覧

BOOK 2	文法	READING テーマ	TOEIC テーマ
Lesson 1	比較	An Uncertain Future	Disaster
Lesson 2	関係代名詞①	Yoko Ono	Inspiring Women
Lesson 3	関係代名詞②	Levi Strauss and Company	Fashion
Lesson 4	関係副詞	Tea Party	Politics
Lesson 5	複合関係詞①	The Panda	Animals
Lesson 6	複合関係詞②	Things Are Heating Up	Environment
Lesson 7	分詞構文	Artist and Activist	Social Issues
Lesson 8	仮定法①	“Nadeshiko Japan”	Sports
Lesson 9	仮定法②	Pain	The Human Body
Lesson 10	否定	Open for Business	Global Economy
Lesson 11	強調・倒置	Yuri Gagarin	Space
Lesson 12	句動詞	A Hungry Planet	Food for Thought
Lesson 13	冠詞	The EU	Globalization
Lesson 14	頻度の副詞	Seniority Rules	Seniority
Lesson 15	SVの一一致	Gender Expectation in Japan	Gender

クラス定員、英語の時間を優先した時間割編成、専任教員増など、「教育の質の保証」がますなされるべきである。

(8) 希望—基礎からの再スタートへ

これまで本学の英語「基礎」クラスは、目的・目標において「初級」との差異化が十分になされていなかった。英語カリキュラム全体のなかでの位置づけもあいまいであった。来年度のカリキュラム再編は、これを見直す良い機会となった。クラス数を3クラスから8クラスに増設し、受講期間を1年から半期に変更する。そしてこれまで「初級」で行っていた内容を「基礎」に移し、英語の基礎を半期でしっかりと復習させることを目標とする。その後、日本人教員とネイティブ教員との独立型チーム・ティーチングで行う「思考」力育成も備えた「初級」へと進む学習段階を形成する。

「基礎」クラスでは、とくに丁寧で温かい指導が何より望まれるだろう。それを通じて、一人でも多くの学生が、「もう一度やり直そう」という思いを抱いてくれることが望まれる。「基礎」クラスの目標と内容に合わせ、中学・高校での教育経験が豊富な日本人教師を配置する。今年度から新入学生のプレイスメントテストに、新たにTOEIC Bridgeが導入された。「基礎」クラスを受講した学生の入学時と前期終了時のTOEIC Bridgeのスコアとを比べると、平均値がおよそ20点上昇し、当初に立てた目標を達成した学生の割合は、およそ6割であった。一人でも多くの学生に、新たな気持ちで英語に興味を抱き、「国際語」の勉強に対する意欲を持たせるよう導いていくことが使命である。

(9) 授業学—総合的授業デザインへ

「優れた授業とは何か」、答えは実に簡単である。学習者のことしきりとを考えた授業を丹念に準備すること、それに尽きる。教員に授業準備のための時間がしきりと保障される必要があろう。多忙による影響がこの準備時間の削減や授業での疲労感に至ることは避けられるべき問題である。

最近、「授業学」ということばが見られるようになった。その研究は確実に蓄積されているといえよう²¹。そこには授業という学習空間の工夫・デザインに留まらず、自学自習、学習習慣の育成も含まれると考える。小まめなテストの作成、採点、面談など、授業時間外でのケアが必要とされる。筆者の授業では、月に1回日ごろの学習状況を報告させ、アドバイスによるフィードバックをしている。またネイティブにチェックを受けるライティングを課しているクラスでは、毎月ノートを提出させてている。能動的な学習習慣を育成する上で大切なことである。また、e-learningはおよそ10日置き程度に学習状況をチェックしている。授業前後の準備と処理にどれだけの時間を注ぐかが、授業デザインに、そして学生に大きな影響を与える。多忙のなかで犠牲となる危険性も高いが、本来もっとも優先されるべき部分であると考える。授業学—授業デザイン、学習者へのフィードバックなど、非常勤講師とともににより改善していくよう、少しづつであるが英語教育に関する文献の輪読や意見交換会などの英語科FDを実施し始めたところである。

おわりに

与えられた任期における自分のミッションの実践報告、そしてその実践のなかから、本学だけではなく、広く今後の学士課程における英語教育について論じた。

ジェンダー史と英語教育という2つの専門を持つ筆者にとって、後者はあくまでも実践を基盤に置いている。教材作成も含め、総合的な授業デザインを今後も研究テーマとしていきたい。また2つの専門分野のリンクも今後の課題である。ジェンダー論「多性研究」への英語の導入—文献講読、英語による授業、英語版ジェンダーテキストの作成など—さまざまな手法を工夫していきたい。

[データ処理協力]

亀山博之 | Hiroyuki KAMEYAMA
(教育助手 Teaching Assistant)

註

1. 山口=内田雅克(2011年)「『知の攪乱』が再生する『生と性』—ジェンダー論『多性研究』から探る教養教育の手法と意義」『東北芸術工科大学 紀要』
2. 平泉渉、渡部昇一(1995年)18・19号『英語教育大論争』文春文庫 文藝春秋
未だに大学英語教育において燻っているように思える議論である。
3. AERA English(2009年) NOVEMBER 16-20頁
4. 拝田清(2010年)「大学英語リーディング教材に見る言語文化観」『英語教育学大系 第1巻 大学英語教育学』大学英語教育学会監修 森住衛他編 大修館書店 92頁
5. ガイ・クック 斎藤兆史・北和丈訳(2012年)『英語教育と「訳」の効用』研究社
6. 2009年度より英語教育サポートに採用された教学事務室教育助手の亀山氏に負うところが大きい。
7. 6に同じ。
8. 文法テストは、拙著『忘れてしまった高校の英語を復習する本』(中経出版)を自習させ、毎時間理解度確認テストを実施している。語彙テストは「上級・最上級」クラスで使用した『TOEIC完全攻略3000語』(語研)を、最初から復習させ、テストを実施している。
9. 2010年度より、山形放送勤務のアメリカ人Randy Nelms氏に依頼している。
10. Jennifer Jenkins(2007年) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity* Oxford University

11. 鳥飼玖美子(2011年)『国際共通語としての英語』講談社現代新書
12. 矢野安剛(2010年)「大学英語教育の国際化」『英語教育学大系 第1巻 大学英語教育学』大学英語教育学会監修 森住衛他編 大修館書店 40頁
13. 前掲「大学英語教育の国際化」40頁
14. 前掲『国際共通語としての英語』183頁
15. 前掲 *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity* pp.247
16. 安井稔(2012年)「TOEICの賢い利用法」『Web英語青年』
17. 成毛眞(2011年)『日本人の9割に英語はいらない—英語業界のカモになるな!』祥伝社 83頁
18. 前掲 AERA Englishにおいて、複数の企業がTOEICのスコアに「努力の素質」を見ている。
19. 斎藤兆史「『使える英語』なんて幻想だ」朝日新聞、2009年8月1日朝刊オピニオン掲載、大津由紀雄「これでいいのだ『学校英語』」朝日新聞、2010年8月4日朝刊オピニオン掲載
20. 前掲『日本人の9割に英語はいらない—英語業界のカモになるな!』
21. 鈴木政浩(2010年)「英語授業学の視点と大学英語教育への適用」『英語教育学大系 第11巻 英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』大学英語教育学会監修 山岸信義他編 大修館書店 239頁

*訂正とお詫び

2011年紀要18・19号の拙論において、渡部周子氏の著書名に誤りがありました。正しくは『〈少女〉像の誕生』です。訂正してお詫び申し上げます。

[執筆者]

山口=内田雅克
YAMAGUCHI=UCHIDA Masakatsu
教養教育センター
Center for Liberal Arts
教授
Professor